



新しいまちづくりで生まれ変わる女川町、写真中央が災害公営住宅

# 津

波の写真を撮って来てくれ。揺れが収まると上司からそう指示された。指示を受けたのは、石巻日日新聞社に入社して5カ月の横井康彦記者だった。

「津波を見たことがなく、海に行けば撮れるだろうと安易に考えていました。高台から望遠で狙えばよかったです。当時はそんなこともわかりませんでした」

横井記者の危うさを見抜いた先輩記者から「代わってやるよ」と言われ、横井記者は山ひとつ越えた町中の取材に走った。先輩記者は海から300メートル離れた地点でカメラを構えたが、大津波はそこまで押し寄せた。先輩記者はカメラを捨てて走り、わずか数秒の差で一命を取りとめた。

「私が行っていたら、写真を撮ろうと思って海岸に戻り、判断を誤って死んでいただいでしょうね」

## ◆被災地のなかで最大の被害

石巻市に隣接する女川町で新聞販売所を営む横井一彦さん(横井記者の父)は、300軒の家に配達

だが、一枚の壁新聞では配達エリアにある避難所すべてに伝えることはできない。コピー機も停電で使えず、当初は壁新聞を手書きで複写するしかなかった。横井さんが当時を振り返る。  
「A4判の紙に写した壁新聞を避難所の各部屋に配る手伝いをしました。20年、新聞を配ってきて、このときほど『ありがとう、待ってたよ』と言われたことはありません。被災者が状況を知らなかったという様子が伝わってきました」  
横井記者が続ける。  
「当初は被災状況でしたが、やが

# 新しいまちを丸ごとつくる

宮城・女川町民陸上競技場跡地地区災害公営住宅 (2014年◆平成26年竣工)



## 新田匡史

illustration: Shigeyuki Sakata

を始めたところだった。その時、強烈な揺れに襲われたが普段通り配達を続けた。4軒に配り終えたとき、嫌な予感がした。横井さんは販売所兼自宅に残る父を迎えに帰り、高台の町立病院(現・地域医療センター)に避難させた。

「その後、貴重品ともう1台の車を取りに自宅に戻ったんです。シンとした家の中で言いようのない恐怖感に襲われ、これはマズいと思って車を飛ばしました」

再び病院に着いて海の方角を見ると、瓦礫を呑み込んで向かってくる津波の先端が見えた。建物に走ると1階でエレベーターを待つ車椅子の列ができていた。頼まれて1人を担ぎ階段を上った。そこを津波が襲ったのは、それから数分後のことだった。

「1階にいたご夫婦は天井まで持ち上げられ、運よくつかまるものがあつたので助かったと聞きしました。もう少し遅かったら、私も津波に呑まれていたでしょう」

高台にある病院の1階部分まで呑み込んだ女川町の津波は14・8

のマネジメントだったのです」

女川は、阪神・淡路大震災での実績、国との連携、いち早く被災地に入って復興支援に携わった姿勢などを評価し、URにマネジメントを任せる決定を下した。2012年3月には女川町復興まちづくり推進パートナーシップ協定を締結し、今も日々激論を交わしながらまちづくりを進めている。

町長の指摘した問題に、URはまちの動脈・国道398号線にパイパスを通し、一般車輛の工事エリアへの進入を遮断するという方針で応えた。町民の安全確保と工事の迅速化が図れる。スピードを重視した成果が、地域医療センターより高台にある陸上競技場跡地地区災害公営住宅の完成だ。UR女川復興支援事務所副所長の太田謙は語る。

「全部で200戸の集合住宅です。元々戸建住宅で生活していた方が多いため、階数を低く抑えて住み易さに配慮し、水産業のまちらしく、漁具などが洗えるようピロティに水洗い場も設置しました」

地元住民の生活への配慮だ。さらに言えば、女川には集合住宅がほとんどない。実際に居住するイメージを持ってもらおうと、通常の公営住宅では作らないモデルルームを昨年夏に設置した。今年3月の完成と同時に入居した横井さんが語る。  
「モデルルームを見た時点で安心して住めそうだと感じ、新しい生活のイメージもできたので応募することにしました」  
須田町長は、新たなまちづくりによって過疎化・高齢化から脱却したいと考えている。  
「被災した東北沿岸部は、10年経てばそれぞれ復興を果たしているでしょう。そのとき、女川が多くの人に選択されるまじになっていくかどうかが大切なことです」  
安全で新しいまち。その一刻も早い完成が待たれている。



メートル、最大遡上高は34・7メートルに達した。死者・行方不明者は町民の8パーセントを上回る800人を超え、3分の2の家屋が全壊した。半壊、一部損壊も含めると被災家屋は9割近くにのぼり、女川町は被災率で最大のまちとなった。横井さんの販売所兼自宅も流され、病院の敷地に停めてあつた2台の車は、まだ残骸すら見つかっていない。

横井記者の石巻日日新聞社は半地下にある輪転機が浸水。ライフレインも止まり、翌日の新聞を印刷することが不可能となった。それでも、被災者に情報を届けなければならぬ。社は壁新聞の製作を決定する。記者が被災状況取材し、集めた情報をもとに作った記事をスタッフが新聞用のロール紙を切って書き記した。

街に、ルネッサンス  
**UR 都市機構**  
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます  
[企画制作]新潮社